



「守山宿・町家 “うの家”」がオープンしました（本文中に関連記事があります）

目次 / contents

特集「まちづくりと城」

- 名古屋城再生、百年の夢 / 尾関利勝 ②
 「和歌山城」から見る和歌山市のまちなか再生 / 清水紀行 ⑤
 「城下都市（まち）」+「にぎわい景観」=「中心市街地活性化」
 / 岡本壮平・絹原一寛・橋本晋輔 ⑥
 平群町で山城モニターツアーを開催しました / 鮎子田稔理 ⑧
 いきつづける城跡、竹田城 / 小阪昌裕 ⑨

ひと・まち・地域

- 中山間地域での景観形成～景観をきっかけにまちの活力へ
 つなげる戦略 / 絹原一寛・西村創 ⑩
 奈良の高級イチゴ「古都華」に恋して… / 原田弘之 ⑫
 伊賀市「七の花」・アグリフードEXPOに参戦 / 鮎子田稔理 ⑬
 日本初のエンタメ「ギア」京都でロングラン開始 / 森脇宏 ⑭
 伝承文化を見直し、未来に引き継ぐ野里まちづくり
 / 中塚一・羽田拓也 ⑯
 守山市歴史文化まちづくり館「守山宿・町家 “うの家”」が
 完成しました / 三浦健史 ⑱

きんきょう

- 「地域産業政策のこれからを考える」シンポジウムに参加して
 / 杉原五郎 ⑲

まちかど

- 「本格フレンチを気軽に楽しみたい」 / 山崎博央 ⑳



ひと・まち・地域

今からおおよそ400年前、日本はまさに空前の築城ブームでした。

そのためここ数年で築城400年を迎える城がたくさんあり、各地では記念行事が開催されるなど、昨今、全国的な城ブームが起こっている要因にもなっています。



城は地域のシンボルであり、誇りでもあります。地域経済が疲弊する今日、城をまちおこしの起爆剤として活用されるまちも多くあります。

今回の特集では、アルパックがお手伝いしている城を軸としたまちづくりを様々な切り口でご紹介します。

名古屋城再生、百年の夢 名古屋事務所 尾関利勝

◆はじめに 名古屋城再生に関わる歴史

濃尾平野の中樞を占める尾張は、熱田神宮の言われからおよそ1900年前、ヤマトタケル伝説に関わる大和国家の形成期に遡る。その尾張の中心、城下町名古屋は慶長14年(1609年)の徳川家康の命による名古屋城築城(慶長15年・1610年)と清洲越(清洲からの遷府)にはじまる。

平成21年(2009年)、市長選の争点となった本丸御殿復元は、賛否を問う市民討論を経て継続され、平成23年(2011年)夏、「玄関虎の間と表書院」の上棟を迎え、平成29年度(2017年)の竣工をめざし、今世紀最大の近世伝統木造建築の工事が着々と進められている。

昭和20年(1945年)5月、第二次世界大戦名古屋大空襲により、城郭建築の旧国宝第一号であった名古屋城は一部の櫓を遺し、大半を消失した。

この時、美術・工芸と建築が一体となる武家書院建築様式を確立した名古屋城本丸御殿(慶長20年1615年創建)は、障壁画1049点(内重要文化財1047点)を残して惜しくも消失した。

昭和34年(1959年)、戦災復興の願いを込めた天守再建以来、本丸御殿再建は市民の悲願となり、その後、名古屋市による名古屋城再生と御殿復元のための調査研究、御殿再建を願う市民運動、障壁画の復元模写が行われ、愛・地球博と同時に開催された名古屋城博を契機に、2008年秋、本丸御殿復元工事がはじまった。

現在、名古屋城は国の史跡、都市公園に指定され、再建された天守などが博物館相当施設として、年間およそ150万人の入場者がある。

◆名古屋城の特徴

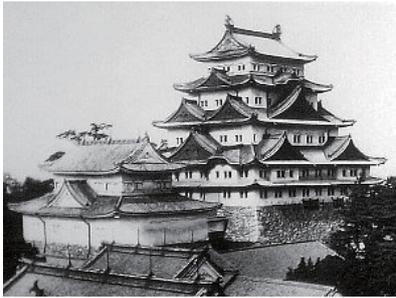
“尾張名古屋は城で持つ”と唄われた名古屋城は、戦国から太平に向かう徳川幕府成立期に、西国大名に対し、徳川の威信を掛けて創建されただけに、城郭の規模、優美さから、旧法による城郭建築の国宝第一号に指定された。現代から見たその特徴を以下に要約する。

近世のニュータウン・尾張名古屋

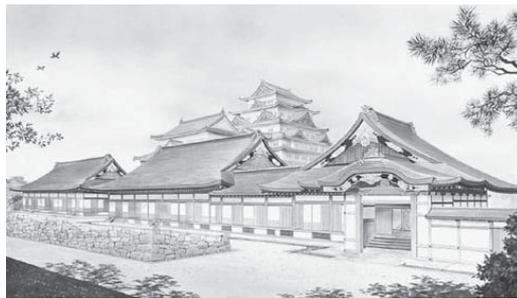
城下町名古屋は信長以来の尾張の中心、清洲から社寺、町人を移し、京、江戸からも商人を集めた(これを清洲越と呼ぶ)。天下統一をめざす徳川の戦略の元、城と城下町を同時に築造した桃山～江戸期の都市計画による新都市=近世ニュータウンであった。



城下町図(制作:アルパック)



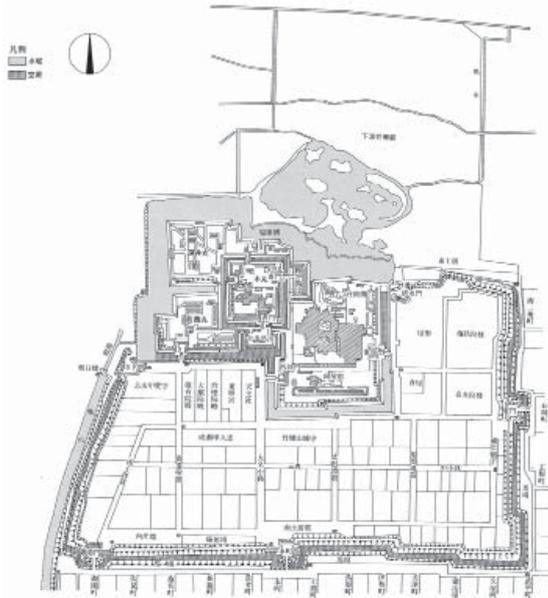
消失前の城 天守 (出典：名古屋城所蔵)



御殿復元図 (出典：名古屋城所蔵)

徳川の威信を示す日本一優美な名城

名古屋城は五層天守に金の鯨を頂き、高さは江戸、大阪城に次ぐが最大の面積を誇り、日本一優美な城と評された。築城には石垣など土木工事に佐久間、滝川など普請奉行5人、福島正則、加藤清正、前田利光など大名20人を動員、天守や御殿など建築工事は城郭建築の精鋭・小堀遠州、大工棟梁・中井正清はじめ作事奉行9名が当たった。まさに名古屋城は当時の日本の城郭建築を象徴するものであった。



名古屋城全図 (出典：小学館 名古屋城全図)

美術・工芸・建築が一体の本丸御殿

本丸御殿は慶長20年(1615年)、公家書院建築の桂離宮古書院と同年の創建で、部屋毎に文脈を持つ障壁画を施した武家書院建築様式を確立した。当初は藩主の宿所として創建されたが、二之丸御殿築造後は將軍上洛時の宿所として改築、武家の威厳を示す玄関・虎の間、表書院・花鳥図、対面所・風俗図、上洛殿・帝観図が狩野派により描かれ、將軍家光に江戸城改築の強い影響を与えたとされる。

徳川思想を忠実に伝えた二之丸御殿と庭園

二之丸は陸軍鎮台入営時に能舞台二つを持つ御殿を取り壊し、庭園跡だけがのこる。初期に改築された庭園は徳川の儒教思想を反映する中国式庭園で、



本丸御殿障壁画 (出典：名古屋城所蔵)

中国の石に似た当地の名石・佐久石など、名古屋の茶庭のルーツとして今も影響を遺す。

街道・町並みを持つ尾張藩独特の広大な庭園

“尾張藩江戸下屋敷の謎”(中公新書：故小寺武久名古屋大学教授著)で知られる尾張藩江戸下屋敷は戸山園と呼ばれ、早稲田大学、周囲の高校、公園、都営住宅一帯に当たる。大名庭園に影響を与えた庭



二之丸図 (出典：小学館 名古屋城全図)



ひと・まち・地域



能楽殿（撮影：アルパック）



名古屋の茶庭（撮影：アルパック）

には広い池、小田原宿の町並み、箱根山（現・戸山公園）等が配置され、町並みを営業して客をもてなした。これと類似する名古屋城下深井丸御庭は、名城公園の下に埋もれている。

◆名古屋城再生の意義

現在、各地で幾多の城郭建築が再生されている。その中で名古屋城全体を再生する現代的な意義について、名古屋城のPRを含めてご紹介する。

近世初頭城郭建築の唯一の本格的再現機会

明治に離宮とされた名古屋城は昭和7年（1932年）、名古屋市に下賜され、以来昭和12年（1937年）まで、詳細に実測調査された。徳川幕府直営の主要4城の内、実測図が残る名古屋城だけが城郭全体の旧状再現を唯一可能とする。明治に取り壊された二之丸御殿と庭園、下深井丸御庭は古絵図が遺されている。

今に生きる名古屋文化再生の象徴

名古屋地域では能・謡曲、茶など武家に由来する文化が盛んで、庭には尾張茶庭の様式が伝えられ、木曽材とともに大工、左官、瓦などの木造建築技術、和紙、木工、欄間、飾り金物などの工芸、桃山～江戸期に発展した陶器などが今も息づく。名古屋城の再生は、同時に尾張名古屋文化再生の機会でもある。

近世日本文化再興と伝承の日本的拠点

復元として取り組まれる名古屋城再生は修復とは異なる創造を伴う行為で、近世文化と技術の継承、学習・教育機会として、他では出来ない日本的拠点となる意味を持つ。同時に多大な研究を伴う名古屋城の復元再生は、その成果の集大成を国内外に公開する日本近世文化研究の殿堂となるものでもある。

世界の人々を集めた名古屋城全体の再生の夢

昭和34年（1959年）、伊勢湾台風の年、天守再

建は財源9億円の内、市民の浄財は3億円、現在の本丸御殿復元は事業費約150億円の内、50億円が市民や企業からの浄財で賄われている。

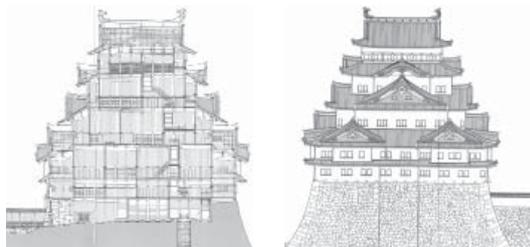
バルセロナの聖家族教会は、世界の人々の参加と浄財で進められ、国際的な文化観光拠点になっている。名古屋城全体の再生過程が世界に公開されれば、世界に示すに日本近世文化の再興として、国際的な文化観光の拠点になる可能性を持つ。

◆名古屋城全体再生への展望

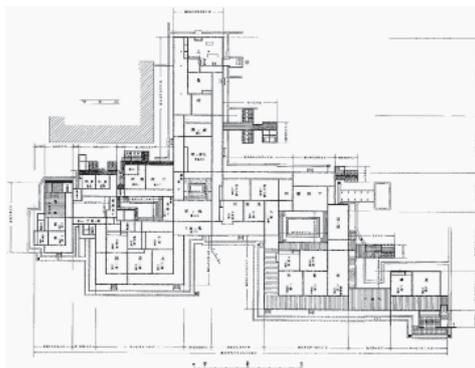
市制百周年を控えた昭和60年（1985年）、アルパック名古屋事務所は名古屋市職員の自主研究が発端となった名古屋城整備構想調査に関わり、名古屋城とその再生の意義を学び、その実現のため市職員有志、市民とともに昭和61年（1986年）本丸御殿再建をめざす市民運動に参加、時々の名古屋城整備に関する調査の傍ら、市民運動を持続し、市内醸造蔵の協力で地酒の名古屋城本丸御殿を醸造、20世紀元年の平成13年には愛知県立芸大教官と名フィル奏者との連携で、春秋に酒蔵コンサートを開催、今年で12年、22回を迎える。

この間、松原前市長が御殿復元を決断、河村現市長が市民討議を経て復元継続を決定した。この経過から行政の大きな事業を小さいながらも市民の声が後押しする関係を学んだ。

名古屋城再生は本丸御殿復元で終わりではなく、名古屋城再生の始まりなのだと考える。濃尾震災で崩壊した多聞櫓はじめ、西之丸の蔵、二之丸庭園と御殿、下深井御庭、RCで再建された天守の木造復元などがまだ遺されている。これらの全体が再生されてこそ、



天守実測図（出典：名古屋城所蔵）



本丸御殿実測図（出典：名古屋城所蔵）



御殿復元現場（撮影：アルバック）

近世城郭建築の代表格、旧国宝第一号の城郭のであった名古屋城再生の意味がある。その実現には、資金、木曾檜などの材料、伝統技術、現代の法規との調整など、多々解決すべき課題が残されている。これらを大局的なビジョンのもと、一つ一つ解決しながら、世界からの人々と浄財を集めて、百年後もその建造を継続する聖家族教会のように、第二次世界大戦で消失した日本近世武家文化の殿堂・名古屋城の再生を市民と世界の参加で、たとえ百年かかっても次世代に受け継ぎながら、実現することを望みたい。

本丸御殿復元完成の暁には、是非、読者の皆様にも名古屋城にお越し頂き、近世日本武家文化の殿堂を心ゆくまで堪能して頂きたい。

和歌山城」から見る和歌山市のまちなか再生 ／大阪事務所 清水紀行

和歌山城は、水戸・尾張と並ぶ徳川御三家のひとつ、紀州55万5千石の名に恥じぬ風格を持った和歌山市の重要な歴史的資源です。幾度となく訪れた消失の危機の度に、市民の熱い後押しを受けて復活し、今に至っています。

城を中心としたまちなかの顔づくりに期待

ところで、和歌山市のまちなかに目を向けると、他の地方都市の例に漏れず、商店街は疲弊しシャッター通りの様相を呈し、郊外型の店舗に買物を依存する状況が長く続いています。行政としてもあの手この手と対策を講じているのですが、なかなか状況は改善していません。

このような状況下において、和歌山市の景観形成、特に「和歌山城を中心としたまちなかの顔づくり」



別名：虎伏城とも呼ばれる威風堂堂たる姿

に寄せられる期待は大きいと思われます。また、現在、市中心部では小学校等の統廃合を受け、跡地活用のあり方など、否応なく市街地の再編を迎える状況にあるようです。

このような複合的な状況をひとつの契機として捉え、積年の課題でもある中心市街地の活性化につながる積極的な展開を図りたいところです。

何故、見えない？城を核としたまちづくり

そもそも和歌山市は、JR和歌山駅、南海和歌山市駅を核とし、その間に和歌山城や商店街集積地が存在する、いわゆる3核構造となっています。

しかし、和歌山市においては、この3核を意識したまちづくりの展開がイマイチ見えにくいように思います。（和歌山出身の私としてもそう感じずにはられません）

城の存在があまりにも市民に馴染みすぎているためか、それとも南国の地・和歌山のさららかな気質のためか、はたまた御三家特有の殿様気質のためか・・・とにかく、和歌山城を核としたまちづくりが戦略的に展開されてきたとは言えないのが実情ではないでしょうか。

和歌山城を核とした戦略的なまちづくりビジョンの共有

現在、JR和歌山駅周辺では、けやき大通りの再開発をはじめ、JAビルの建て替え等が進んでおり、新たな玄関口として整備が進みつつあります。

和歌山城周辺は、堀端通りの裁判所や合同庁舎の建て替えにより、シビックゾーンとしての質的向上につながる動きがみられ、前述したように周辺部の学校統廃合による跡地活用等も今後のまちなか再生の大きなファクターとして期待を集めることになるでしょう。



桜の季節は多くの人々が訪れる



今後は、「JR和歌山駅と和歌山城をむすぶけやき大通りをどうするのか?」「活気が乏しい南海和歌山駅周辺と和歌山城の間は?」など、城を核としたまちづくりビジョンを市民、事業者、行政の間で共有するような取り組みが必要となると思われます。

そのようななかにあつて、和歌山市では平成23年9月に和歌山市景観計画を策定し、和歌山城周辺地域(42.8ha)については景観重点地区に指定することで、より詳細な景観形成の考え方を設定し、和歌山市の顔となる景観づくりへ大きな一歩を踏み出しています。

(※弊社は平成21年度より「和歌山市景観計画策定業務」を受託しています)

和歌山市は中心市街地活性化基本計画が最終年度(平成23年度)を迎えており、事業者の活動意欲を引き出しつつ、次の中心市街地活性化の戦略をどう組み立てていくのが重要課題となっています。そのため、景観計画のなかで、核となる和歌山城周辺地区を明確に位置づけることで、中心市街地活性化施策や観光関連施策との連携を図り、新たなにぎわい創出につながることを期待されています。

時代とともに変容を遂げる城下町都市・和歌山の実現をめざして

これだけの城郭を持つ都市は全国を見渡しても、そうは見当たりません。それだけ貴重な資源を和歌山市は有しているのです。

和歌山城周辺景観重点地区の理念のなかに「普遍的な景観価値を備えつつ、時代とともに変容を遂げる、新たな城下町都市・和歌山としての景観形成を目指す」とあります。

「そこにあつて当たり前の和歌山城を持つ都市・和歌山」ではなく、「和歌山城の魅力を生かしつつ、時代に即した変容を遂げる都市・和歌山」を市民一人ひとりが意識したときにはじめて、『和歌山城を中心としたまちなかの顔づくり』、ひいては『にぎわいある和歌山市のまちなか再生』につながっていくのではないのでしょうか。

城 下都市(まち) + 「にぎわい景観」 = 「中心市街地活性化」

／大阪事務所 岡本壮平・絹原一寛・橋本晋輔

近世の城下町を基礎に発展してきた街は多くあります。幸運にも戦災を逃れ歴史的な町並みが残っている街では、城下町らしさを生かしたまち興しが活発です。しかし、戦災で消失した城下町や急激に現代都市へと成長した都市では、今や城下町の痕跡を探すのも難しく、城下町らしさを期待してきた観光客には少々肩すかしな思い出を作ってしまうこともあります(特に外国人観光客には)。

ここでは、姫路市と明石市を例に、城下町らしさを失った街での中心市街地活性化の取り組みを紹介し、今後のまちづくりについて私見を述べます。

姫路市では…(文化遺産と調和した活性化を考える)

国宝・姫路城は世界文化遺産として、世界的価値を有する歴史資産です。しかし、その城下町は戦災により消失し、戦後は播磨地域100万人の中核都市として都市開発が進みました。実はあまり知られていませんが、JR姫路駅のあたりがかつての外堀で、そこから北側は広大な城下町だったのです。大手門までまっすぐに延びる大手前通り(約900m)の沿道には百貨店や金融機関などのビルディングが建ち並び、正面に天守閣を見据える見事なビスタ景観を形成しています。周辺の約70haが商業地域に指定され、一大商業集積地となっています。

しかし、郊外化の流れの中、中心市街地の商業停滞、人口減少、観光ニーズへの対応遅れなどが問題となり、姫路市では平成21年12月に「姫路市中心市街地活性化基本計画」の認定を受け、インフラ整備や商業活性化、観光振興などの事業が推進されています。商店街の通行量や空き店舗数などの指標は横ばいの傾向を示し、目立った成果は見られませんが、地区内居住者数は順調に増加しています。これは、ここ10年程度の間、姫路駅から約500~700m程度の距離の同心円状に高層マンションが林立しており、その効果と考えられます(地図上確認



姫路駅ホームから見た大手前通りの眺望
(天守閣は平成の大修理中)



明石らしさを醸し出す商店街の景観
(魚の棚商店街)

できるもので15件)。

このように、姫路の中心市街地は、旧来の商店街集積地をベースにしつつ、高層マンションによる住宅市街地化、あるいはいわゆる場末の路地への個性的な店舗の集積など「構造変化」が進んでいます。さらに、駅北コアゾーンの再開発が完成すれば集客の勢力圏も大きく変化するでしょう。

今後は、時代潮流に伴う構造変化にきめ細かに対応しつつ、都心居住や賑わい創出を進める必要がありますが、やはり姫路は「お城あつての姫路」。姫路城と調和したまちづくりや景観形成に取り組むことで、新たな城下都市(まち)づくりが期待されます。

(※弊社は平成23年度「姫路城と調和した中心市街地景観形成検討業務」を受託しています)

明石市では…(通りの魅力化を回遊性につなげる仕掛けを考える)

明石城跡には天守閣がありません。天守台跡はあるので計画はされていたようですが、もと姫路藩という事情もあるのか最初から築かれませんでした。とはいえ城下町は広大で、現在の明石港は運河を掘って港を兼ねたかつての外堀でしたから、明石の中心市街地は全て城下町に収まります。山陽道と港の恩恵を受けて城下町は繁栄しましたが、かつての町割りの上に急激に現代都市を形作っていく原動力にもなりました。現在は、魚の棚商店街や銀座商店街など数多くの商店街が密集する一大商業集積地を成し、城下町らしさは希薄で、むしろ「港町」「魚のまち」の方がイメージされるかもしれません。

明石市では、商店街集積地の活性化を推進するとともに、駅南側の量販店空きビルなどを含む街区の再開発を企図し、平成22年11月に新たな「明石市中心市街地活性化基本計画」の認定を受けました。駅南地区の再開発の推進、バス交通の利便性向上、商店会等の活性化協議などの取り組みを進めています。成果が出るのはこれからですが、最近では姫路B-1グランプリでの「明石焼きひろめ隊」の活躍や商店街でのシャッター絵画「トリ

ックアート」など、地域ブランド化に向けた取り組みの萌芽が見られます。

このように、明石の中心市街地では、駅南の再開発事業に活性化の期待と、一方でそのあおりで商店街集積地を衰退させてはならないという課題認識とが混在しています。

今後は、「明石らしさ」の代表格でもある既存の商店街集積地の活性化を図るため、駅ビルのリニューアルや駅南の再開発事業と共存しつつ差別化(個性化)していくことが必要です。そのためには、個店の努力はもちろんのこと、「通り」としての魅力を高め、まちなかを「回遊」する愉しみを生み出すことが鍵だと考えます。

(※弊社は平成23年度「明石市都市景観形成地区指定検討業務」を受託しています)

活性化にタナボタはない(今から始める“景観でひと(人)もうけ”)

2つの城下都市(まち)の「にぎわい景観」づくりに携わる中で、改めて感じるのは、「その街らしさ」と「腑に落ちる将来ビジョン」の重要性です。有名なお城があっても、「らしさ」や「ビジョン」が強固とは限りません。外部の人間の目線からその街らしさを再確認すること、そして、「地域や通りの将来の姿と、その中で自分がどのような商売をするのか」をつなげて考えることが重要です。それを通りや地域で共有化していくのは至難の業かもしれませんが、お互いに重なり合う部分を探して認め合う(できれば意気投合!)する地道な取り組みが必要でしょう。

活性化の成功例からは「おもてなし」や「ブランド化」といったキーワードが聞こえてきますが、それは「その街らしさに皆で磨きをかける」ということです。いきなりブランド化はできません。まずは美化・清掃や景観整備などから始め、お客や観光客にとって「居心地の良い空間」にしていくことで、徐々に「にぎわいある景観」が育っていくでしょう。その上にお城があれば鬼に金棒、「景観でひと(人)もうけ」です。



平 群町で山城モニターツアーを開催しました
／大阪事務所 鮎子田稔理

「平蜘蛛の茶釜を寄越せば命は許すだと？笑いな・この茶釜だけは断じて信長には渡さぬわ」そう嘯くと松永久秀は平蜘蛛の茶釜に火薬をつめもろともに碎け散るといふ壮絶な最期を遂げる。

その舞台となった信貴山城は現在の奈良県平群町、大和と河内を結ぶ要衝の地にあつてその中腹には毘沙門天を本尊とする朝護孫子寺があり、多くの参拝者が訪れていますが、信貴山城跡を訪れる人は少ないどころか今はその存在すら知られていません。南北 700 m 東西 550 m に渡つて築かれた城は当時奈良県下でも最大級で、曲輪の数は 100 以上にも及ぶ巨大な城跡です。松永久秀は一般的には残忍、狡猾、傲慢といった悪いイメージで知られていますが、信貴山城や多聞城は宣教師ルイスフロイスが絶賛したとされる美しさと機能美を備えており、優れた城郭建築の才を持つとともに茶人としても一流であつたと伝えられています。一度は信長に仕えますが、保有していた茶器を信長に献上を命じられ、信貴山城で名器「平蜘蛛の茶釜」とともに爆死します。

平群町にはもうひとつ中世の山城椿井城があり、この山城は関ヶ原の戦いで石田三成の片腕となつた軍師島左近が筒井家に仕えていた頃の居城と伝えられるものの史料としては築城時期や城主について確実なものはありません。松永久秀と筒井との小競り合いの中で最終的に松永久秀の支配化にあつたのではないかという説もありますが、「三成に過ぎたるものが2つある 島の左近と佐和山の城」と詠われるほど名将として名高い島左近所縁の城ということで地域の方々に愛着をもつて支持されています。

平群町では、この2つの山城を中心とした歴史資源を活用し、幅広い年齢層をターゲットとした観光振興や地域の活性化を図ることを目的として椿井城・信貴山城跡整備構想を現在立案中で、アルパックではそのお手伝いをさせていただいております。

そこで、この平群町の山城を少しでも多くの人に知っていただき、今後どのような整備を行っていくかを考えるにあつての参考とさせていただくために、モニターツアーを昨年 11 月 26 日と 12 月 17 日に開催しました。

当日は三重大学大学院で中世の城郭研究をされている中川貴皓氏に案内をお願いしました。中世の山城跡は、何も知らずに訪れると、ただの山に過ぎません。山城跡を楽しむためには、先人の作成したお城の縄張り図を元に自身の日頃の鍛錬、勉強が必要になりますが、やはり、城郭を読み解く専門家と一緒に登つて説明を聞きながら山城探索を行うのがベストです。

このモニターツアーではそれぞれ 30 名ほどの応募をいただき、中川氏の現地での説明を聞きながら、山城散策を楽しみました。わざわざ関東方面から参加をいただいた方もおられました。

椿井城跡では、平成 22 年頃より地元住民の方々によって草刈などが行われブッシュだらけで立ち入るのが困難とされていた山城跡も今では見違えるようになっています。今後、椿井城・信貴山城ともに多くの人に愛されるよう整備を行っていくわけですが、これまでの城整備のようにコンクリートの復元というような作り物ではなく、むしろ何もない場所に行ってそこで繰り広げられたであろう様々なドラマに思いを馳せることができるような城整備ができればと思っています。





眼下の円山川

いきづける城跡、竹田城 ／大阪事務所 小阪昌裕

今まで、洲本（兵庫県）をはじめ、村岡、豊岡、柏原、篠山、三田、三木、他府県では長浜、亀岡、田辺等の、特に近畿の小城下町のまちづくりを経験してきました。今回は、日本のマチュピチュとして人気上昇中の竹田城（朝来市）の取り組みを紹介します。

いきさつ

竹田城は、JR 山陰本線と播但線の交点に近い竹田駅、また、北近畿豊岡自動車道・播但連絡道路の和田山 IC が最寄り駅等となります。山城の特徴とも合致しますが、但馬の玄関に位置し、山頂からの眺望とともに周辺からの遠望も良いという景観を有しています。桜、新緑、紅葉、雪景色とともに晩秋の雲海も有名です。

但馬での業務は、旧温泉町（現新温泉町）にはじまり（1981年）、全域を対象とした計画づくりに4度関わりました。その中の観光アクションプログラムの作成（1999年）では、竹田城のある旧和田山町の但馬全域から見た位置づけは「竹田城が迎える、但馬の玄関拠点」とし、具体的アクションは「みんなで作ろう山城の郷」としています。その後、朝来郡4町の合併新市の「朝来市」の市章の公募作品の類似調査等（2006年）を担当しました。

巡り

今回は、街なみ環境整備事業により、竹田のまち内の活性化をめざし山頂の城跡と城下のまち内を一体化させる方法についての計画づくりを行いました。まず、かつての造り酒屋の建物を活用しまち内の滞在時間を延ばしお金も落としてもらえ交流拠点としていく考え方に関連し、1ヶ所だけではなく歩いて楽しいまち内全体の魅力的な空間づくりの提案です。内容としては、寺町の街並みや鉄道下を流れる水路等周辺には、昭和時代の懐かしさのある景観が残っており、その保全活用策です。その場合に必要となるのは、地元の人々が参加する交流拠点の経営方法やまち内の景観保全の維持のしくみづくりです。

交通手段別では、徒歩の来訪者が安全に上下の移

動を誘導するため、手すりや階段等の遊歩道の整備、回遊ルートの提案を行いました。また、市が昨夏社会実験として行った電動アシスト付きレンタサイクル運行のルート整備、さらに試験実績のあるシャトルバスの運行形態、ルート、道路整備の提案です。安心してまち歩きができるように自動車の駐車場の設置、一方通行の検討を行いました。

誘い

城跡めぐりして訪れる人を安全に誘導し、城下町の魅力も体験してもらいその結果竹田のまちも活性化するように、ITの時代の中で、現地での多様な情報発信が問われています。そのような考え方のなかで、案内板、説明板等の設置を、駅前、駐車場周辺、国道からまち内の入り口付近、登山道の登り口、寺町周辺等に考えています。その場合大切になるのが、そのサインをよび水にしながら、まち内を人が行き交い、巡り、立ち止まり、言葉を交わすしかけづくりです。まちづくりのツールとしてのサインとして、地元住民と来訪者が一緒につくっていき、常に変化し続けることができるような情報提供としてのイメージが大切です。

結び

古城山と眼下に流れる円山川が作りだす立体感のある歴史的景観を大切に守り、人を引きつける山城からなつかしさで人を和ませる城下へ、山頂からの眺めを生かして上と下の人をいかに導き結びつけるかがこれからの竹田のまちづくりのポイントと考えられます。

但馬の玄関の立地条件を生かし、山、川、まち内の3つの要素の相乗効果により、また立ち寄ってみたくなる、さらに季節や時間帯、同行者、目的をかえてわざわざ行ってみたくなるよう、訪れるたびに新たな自分を発見できる城跡としていきづけてほしいと期待しています。





中山間地域での景観形成 景観をきっかけにまちの 活力へつなげる戦略

大阪事務所／絹原一寛・西村創

景観形成も次の段階（ネクストステージ）へ

平成16年6月に景観法が施行され、平成24年2月1日時点で景観行政団体が526団体、うち景観計画の策定が324団体と、良好な景観形成の取り組みは着実に広がりを見せています（出典：国土交通省ホームページ）。

最近ではこれまで景観の取り組み実績がなくても「景観を積極的にまちづくりに活用しよう」という自治体が増えています。とりわけ人口減少、高齢化に悩む中山間地域は景観をきっかけにしたまちづくりを交流の拡大、活力の増進につなげようという思いがあり、私たちへの相談も増えてきています。景観形成も創意工夫が必要な次の段階（ネクストステージ）に入ったと言えます。

本稿では現在お手伝いしている朝来市をご紹介しながら、これからの景観まちづくりを展望してみたいと思います。

朝来市の概要

朝来市は、兵庫県のほぼ中央部に位置する中山間の豊かな自然と歴史的な資源を持つ市です。現在、景観計画の策定を通して、景観まちづくりを進めています。一般的に朝来市の景観の資源として、皆さんの目に触れたりや耳に入るものは、生野を中心と

した近代化遺産群と街なみ、天空の城とも呼ばれ雲海に浮かび上がる竹田城跡と街なみが多くなっています。しかし、これまで実施してきた市民意識調査などから、そのような有名な資源以上に、市民から大切な景観として認識されているものとしては、日常の生活の背景にある山並みであることが分かってきました。

景観まちづくり、スタート

そのような中で、朝来の魅力ある景観を活かした活性化や地域再生などを積極的に進めていくため、意識啓発や情報発信などを目的として、平成24年1月15日にあさご景観まちづくりシンポジウムが実施されました。

国立明石工業高等専門学校建築学科教授の八木雅夫先生から、景観に着目したまちづくりの大切さや、地域の人たちが主人公となる景観まちづくりなどを、各地の取り組み事例を交えながら講演いただき、市民の方に景観を通したまちづくりの可能性について知っていただきました。また朝来市出身の映像作家、藤原次郎氏から「朝来スケッチ」と題した朝来の景観を捉えた映像の試写を行っていただき、映像としてみる朝来の景観の素晴らしさを再発見させていただきました。そして最後に、市内で景観を



キーワードに活動する方々に、それぞれの活動を紹介していただいた後に、景観まちづくりを広げていくために大切なことなどについて、意見を交わしました。

また平成24年3月3日には、「地域の歴史文化・景観を次世代に」と題した生野鉦山・文化的景観シンポジウムが実施されました。またそれに合わせて地区内では、民家や商店など約150軒に、昔のおひな様やかわりびな、手作りのおひな様が飾られる「銀谷のひな祭り」が行われるなど、まち全体で取り組みが行われました。

このように、朝来市では、景観というキーワードをもとに、様々な取り組みが行われると共に、その裾野を広げる活動を進めています。

景観まちづくりへの期待

シンポジウムの議論などを通じ、景観まちづくりへの期待として次のようなものがありそうだと考えます。

○「景観」から外の応援団を呼び、地域の再発見につなげる

「景観は空気のようなもの」と言われ、その素晴らしさはなかなか気づきにくいものですが、一方で「景観」は地元の方々でない第三者でも関わりやすい切り口です。第三者が参加できるプログラムも組み込んで地元の人々が得られる“気づき”を促したり、仲間を増やしたりできる、そのような期待があると思います。

(こうしたアプローチは、Vol.162「特集：農村とまちづくり」や、Vol.171「篠山想いがたりプロジェクト」でもご紹介させていただいたところです)

○「景観」から身近なまちづくりの行動へつなげる
良さを共有したらそれを守り育てていくための行動へとつなげていくことが期待されます。例え



ば庭先の花の手入れや掃除をする、公園を散歩する、と本当に身近な取り組みが気持ちの良い景観づくりにつながっています。自分たちでできることを掘り起こし、またそれを支援していく動きにもつながります。

○「景観施策」はコストがかからない!?

景観施策はこのような内発的な動機付けを重視しているのです。公園などのハード整備をすることと比較してもお金がかからない施策という側面もあるでしょう。

○「景観」から地域の「ブランド」に

近江八幡市のご担当者が仰っていましたが、景観まちづくりの行き着く先は市の「エリア・ブランドの確立」である、と。景観を軸に地域のイメージを発信して、観光の振興、特産品の開発・販売のみならず、訪れて良し、さらには住んで良しのまちづくりへと波及させていく。それが都市戦略として重要性を増していると思われます。

我々としても農村・産業・観光振興、住宅・環境政策、都市計画、CIといったデザイン、企業とのコーディネートなど様々な分野の専門性を活かし、景観まちづくりの可能性をさらに広げていくお手伝いができたらと考えております。



奈良の高級イチゴ

「古都華」に恋して…

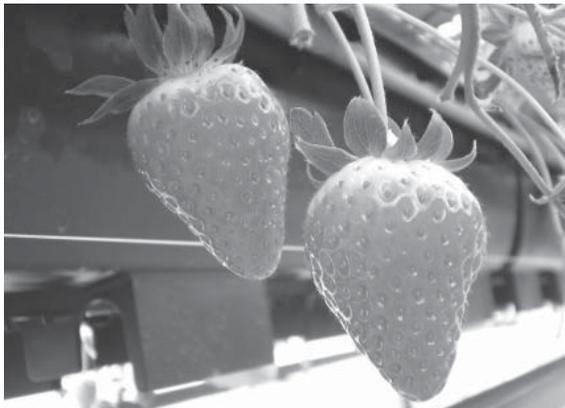
大阪事務所／原田 弘之

冬はイチゴ売場がにぎやか

昔、イチゴは牛乳をかけて、砂糖を入れて、イチゴをつぶしながら、牛乳の色がピンクになるのを楽しみながら食べたものです。いわゆるイチゴミルクです。しかし、今のイチゴは甘く、生食でも十分食べられます。スーパーに行くと、とよのか、さがほのか、あまおう、あすカルビーなどいろいろな種類のイチゴが並んでいます。産地も全国津々浦々で、各府県が、糖度が高く、病気に強い品種の開発を競っているようです。そして、デパートの果物贈答コーナーに行くと、高級イチゴが並んでいます。12粒入りで3,000円～5,000円、さらには1万円を超える「白いイチゴ」もあります。1粒1,000円を超える巨大なイチゴもお目見えです。ちょっとしたイチゴバブルかもしれません。

奈良・平群町のイチゴ「古都華」

奈良県は、関西圏では有数のイチゴの産地です。平群町は生駒山系の東麓に位置し、大阪府に接する、丘陵部に広がる都市近郊型の田園地帯です。ここで今回、主役である「古都華（ことか）」は育てられています。この品種は、「アスカルビー」の開発以来10年ぶりに、奈良県が開発したイチゴで、平成21年から出荷され、平成23年10月に品種登録されました。女峰やさちのか、紅ほっぺなどと交配し、3,000株より品質のよいものだけを選抜して開発されました。糖度と酸味ともに高く濃厚な味で、濃いルビー色で、色つやがよく、果皮が硬めで歯ごたえがあり、「食べた感」があります。そのため、輸送



にも有利な品種です。

現在、奈良県全体でもまだ生産農家は70数戸、栽培面積は3haと少なく、これから市場で増えていく品種です。平群町でも古都華を生産している農家は5戸であり、現状で販路はありますが、良質な農産物であるため、より有利な条件の販路を探していました。そのため、全国規模の農産物の見本市・商談会である「アグリフードEXPO」に出展することにしました。

アグリフードEXPOへ出展

この見本市は、毎年、東京と大阪でそれぞれ年1回開催されており、今回は2012年2月14日、15日に大阪南港ATCであった市に出場しました。会場には、300の出展ブースが並び、来場者は1.3万人を超える大規模イベントです。平群町からは、イチゴ農家からなる「平群イチゴ研究会」として出展し、百貨店や高級スーパーとの取引をめざして、3Lサイズの立派なイチゴを化粧箱に15粒並べた「古都華のギフト商品」をつくりました。卸価格で2,800円なので、店頭価格は4,000～5,000円を見込んでいます。

来場者は、食品関係の卸や小売業、ネット通販、百貨店や飲食店、パッケージ会社や生産技術の会社など多岐にわたり、ブースの前で名刺交換や商品の説明、取引条件等について商談を行いました。イチゴの味に関する感想は「おいしい!」「甘い!」と拔群でした。また、今回のブース展示の特徴は、「お雛様」です。時節を取り入れた演出、そしてイチゴのかわいらしい雰囲気がお雛様とマッチします。雛壇に並べられたイチゴは注目を集め、写真やテレビ取材の撮影ポイントとなりました。アグリフードEXPO以降も、問い合わせや商談が継続しています。

「古都華」をトップバッターに平群のブランド化に向けて

私たちは、現在、平群町の道の駅（道の駅大和路へぐり・くまがしステーション）の活性化の検討をお手伝いしています。そして、その一環で、アグリフードEXPOに出展しました。



平群町の道の駅は約10年前に開店し、これまで平群産にこだわった農産物の直売所を中心に売上を伸ばしてきました。ところが近年は、近隣での関連店舗の増加や、農家の高齢化等により、農産物の質・量ともに伸び悩んでいます。そうした中で新たな挑戦として、付加価値の高い農産物を設定し、農産物全体の質を向上させること、来訪者による消費だけでなく、地域外に打って出ることにより新たなマーケットを開拓することを提案しています。それにより「平群」の知名度の向上も図ります。今回はその先発隊として高級イチゴ「古都華」の登場となったわけです。

結果がすぐに出るわけではありませんが、こうした取組を継続的に行っていくことが必要と考えています。全国に道の駅は今や1,000カ所近くあり、農産物の直売所もかなりの数があります。また都市部のスーパーでも地産地消コーナーなどインショップの動きも活発化しています。そして人口減少・少子高齢化の中、地産地消の取組自体が競争の時代を迎えています。そうした状況の中で、地域発の農産物や特産物、そしてそれらの販売拠点が、今後どう生き残り、役割を担い、地域に愛されつつ、継続的にマーケットの心をつかんでいくか、そのあり方が問われています。

アグリフードEXPO 番外編

伊賀市「七の花」・アグリフードEXPOに参戦 大阪事務所／鮎子田稔理

環境にやさしい農業を実践し伊賀市の地域ブランドの価値向上を目指して19年度からはじまった伊賀市菜の花プロジェクトをアルパックでお手伝いさせていただいて3年目になります。

伊賀市産菜種を使った菜種油「七の花」シリーズは、地道に順調に生産と売り上げを伸ばしつつあります。今年は新商品開発ということで、エクストラバージンオイルのろ過工程を機械ろ過で行うことによって生産性をあげてコストをおさえた「ファインバージン」と焙煎をこれまでの70℃から130℃まであげてじっくり焙煎し、香りに深みを加えた「深入り焙煎」

が新たに商品ラインナップに加わりました。

その新商品やギフト用セットとともにさらなる販路の拡大を求めアグリフードEXPOに出場してまいりました。

菜の花の黄色で統一されたブースは300ある出展ブースの中でもひと際目立つ存在でした。

百貨店のバイヤーの方や個人で営む飲食店の若きシェフなどにパンにつけた「七の花」を試食してもらいましたが、ほのかに香る菜の花の香りや美しい色合いに、手ごたえのある反応をうかがうことができました。

商品に関するお問い合わせは大山田農林業公社まで。0595-47-0151





日本初のエンタメ「ギア」 京都でロングラン開始

大阪事務所／森脇 宏

外国人も楽しめる新たな観光コンテンツを関西につくるため、「ギア」という演題のノンバーバルパフォーマンス（非言語の舞台劇）のロングラン公演を、4月1日から京都市内で開始します。私も理事を務めているNPOが主宰するもので、ぜひ鑑賞にお越しいただいて、このチャレンジをご支援ください。

外国人が楽しめるコンテンツの創造

関西は、我が国の世界遺産（文化遺産）12件のうち5件が集積する世界遺産集積地域で、外国人観光客をはじめ、多くの観光客を集客できるポテンシャルを持っていますが、外国人のナイトライフのメニューが少ないことが課題の一つとなっています。

今回、ロングラン公演を始めるノンバーバルパフォーマンスは、文字どおり言葉が不要なライブエンターテイメントですので、外国人も子供も楽しめるものになっています。鑑賞時間は1時間強で長くはなく、チケット代も、大人4500円、19～22歳&60歳以上3500円、4～18歳2500円とファミリーで鑑賞しても、リーズナブルになっています。

また、外国人観光客の継続的な集客を図るためには、外国人観光客が買うガイドブックに掲載されることが極めて有効ですが、ガイドブックに掲載されるためには「いつ行っても鑑賞できる」状況をつくる必要があります。今回のロングラン公演は、専用劇場を確保し、こうした状況づくりをめざしたチャレンジでもあります。



ギア（出典：NPO法人ライブエンターテイメント推進協議会）

ロングラン公演による産業化

現在、我が国のリーディング産業として、クリエイティブ産業への期待が大きくなっています。クールジャパンを標榜した多様な取り組みが、内閣府（知的財産戦略本部）、経済産業省、外務省、国土交通省・観光庁、文部科学省・文化庁など、国の多くの関連省庁で行われています。

今回の公演も、クリエイティブ産業の一環として位置づけることができますが、産業として成立するには、キャストやスタッフの安定的な収入が得られることが不可欠です。従来のライブエンターテイメントは、会場を借りて期間限定の公演を行うスタイルが多いため、公演期間以外は収入がなく、新たな会場を借りるたびに、舞台設営費や稽古時の人件費等の初期費用などが嵩み、産業として成立させるには多くの障害がありました。

今回のように専用会場を確保して、連日公演を行うロングラン公演が成立すれば、安定的な収入が確保され、初期費用の回収も長期間で可能となります。すなわち、ロングラン公演は、産業として成立させるためのチャレンジでもあります。

世界に広がるノンバーバルパフォーマンス

ノンバーバルパフォーマンスとして有名なのが、ニューヨークの「ブルーマン」という作品で、ブロードウェイのはずれの観客席300人程度の劇場で、同じ作品のみを20年間、毎日公演し、シカゴ、ボストンにも専用劇場を設けて5カ所で公演しています。同じくブロードウェイでは「ストーンズ」という作品も人気があり、17年目に入っています。

お隣の韓国では、「ナンタ」が有名で、15年目を迎え、韓国内に300～350程度の客席数の常設劇場を4つ持っています。この「ナンタ」の後に数多くの作品が登場し、今では12のノンバーバル・パフォーマンスの常設公演が行われています。ちなみに、韓国では韓国観光公社を中心に、国家プロジェクトとして公演観光マーケティングに力を入れており、韓国観光公社は2006年から毎年、KOREA IN



ギア (出典：NPO法人ライブエンターテインメント推進協議会)

MOTIONというノンバーバル・パフォーマンスフェスティバルを開催しています。

世界チャンピオンが揃ったギア

今回公演する「ギア」のプロデューサーは、2009年の水都大阪に突如現れて、話題をさらったラバーダックの仕掛け人である小原啓渡氏ですので、面白いことは確実ですが、さらにキャストに、関西在住のブレイクダンス、パントマイム、バトントワラーの世界チャンピオンが揃っていますので、子供も楽しめるだけでなく、決して子供だましではない本物が鑑賞できます。

オリンピック以外の世界チャンピオンが、その実績を仕事に活かそうとしても、これまでは〇〇スクールの教師くらいしか選択肢がありませんでしたが、貴重な人的ストックをエンターテインメントで活かせるという意味でも、「ギア」の意義は大きいと思います。しかも、ロングラン公演を行うためには、キャストの一人でも怪我や病気で欠けることは許されませんので、ダブルキャスト、トリプルキャストといって、これらの一流キャストが、自分の代わりに演じることが出来るキャストを育成してきています。ロングラン公演は、こうした人材育成の面でも大きな効果があります。

会場は京都市の都心・三条御幸町

ギアの会場は、京都市の都心である三条御幸町にある「ART COMPLEX 1928」です(右図参照)。

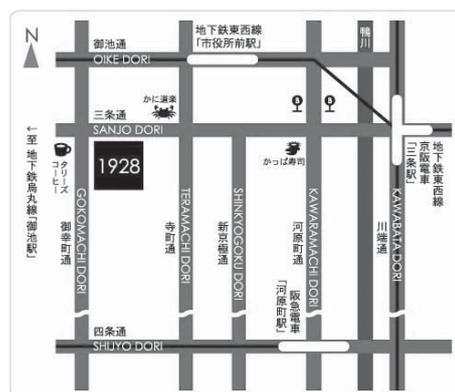
ここは、1928年(昭和3年)に大阪毎日新聞社京都支局ビルとして建築されたビルで、京都大学の建築学科を創立し、「関西建築界の父」とも言われる武田五一先生が設計されました。アール・デコの影響が認められ、意匠史の上からも注目に値する建築物として、京都市登録有形文化財に登録されています。

公演は、平日は夜の1回公演(火・水は休演)、土・日・祝日は1日2回公演となっています。詳細は、ギアのホームページ<<http://www.gear.ac/>>に掲載されていますので、こちらのサイトをご覧ください。

関西発の新たなクリエイティブ産業の創造

今回の取り組みは、外国人観光客も楽しめる観光コンテンツの創造と、クリエイティブ産業の育成が目的ですので、「ギア」の成功だけでなく、第2第3の「ギア」が次々と登場し、産業として成立していくことが望めます。このため、「ギア」を第1号としつつ、第2第3の「ギア」を支援する仕組みづくりにも、同時並行的に取り組んでいます。

これはKCF(Kansai Creative Factoryの略称)と呼ばれる取り組みで、近畿経済産業局の提唱から始まっています。ブレイクする可能性があるコンテンツを、資金、会場、プロモート等の面から支援する仕組みを、(株)FM802、(株)角川マガジズ、(株)電通等にも参加していただいて、現在検討しています。初期費用を市民が支援する市民ファンドも検討していますので、今後のKCFの取り組みにもご注目ください。





傳承文化を見直し、未来に
引き継ぐ野里まちづくり
大阪事務所／中塚一・羽田拓也

人身御供の奇祭「一夜官女祭」

大阪市西淀川区野里地区では、古くは1月20日丑三ツ時に女の子を唐櫃に入れて人身御供としていたのを、岩見重太郎が救ったとし、村の災厄除けの祭りとして今に伝えられる「一夜官女祭」が開催されています。（現在は新暦の2月20日午後）

私たちは、これら傳承文化を活かしたまちづくり活動を展開されている「野里まちづくりを推進する会（ヒクイナ会）」を、大阪市のまちづくり活動支援制度を活用し、平成18年から5年間（内、アルパックは3年間）支援させていただきました。よく言われるようにこのような地域でのまちづくり活動には終わりが無く、野里地区でも支援期間が終了した現在も、様々なまちづくり活動を継続して展開されています。そのため本稿では、中間地点（スタート地点？）として、これまでの活動の一端をご紹介します。

地域の方に地域の傳承文化を知ってもらう

野里地区の野里住吉神社では、江戸時代から地車と太鼓を勇壮に曳きまわす夏祭りと、上記の一夜官女祭りという、動と静の好対照の傳承文化が継承されています。近年、徐々に地区外の歴史や文化に興味がある層に知れ渡るようになり、祭りを見学に来られる方々も増えてきたのですが、逆に、地区内の住民の方々がその由来などについて余り知らない



一夜官女祭の行列

いう事態も生じてきました。

そこで、ヒクイナ会では、先ず、野里の歴史・文化を紹介するために「おもしろ歴史ガイドブック『のざと』」を編集・発行されました。『のざと』は、現在も野里のまち歩きや観光ボランティアなどの際に、活用されています。

子ども達に地域の傳承文化を知ってもらう

また、地域の傳承文化を伝えていくために、国の登録文化財である「池永家」と資料館（寺子屋から戦前の教科書資料等が展示されている）での小学校の社会見学や、一般団体見物者へのボランティアガイドを実施されています。さらに夏祭りと一夜官女祭における紹介ガイド、加えて大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会の「大阪あそ歩」との連携による「まち歩き」等、ヒクイナ会独自でボラン



池永家で小学校の社会見学を開催



夏祭りでは地車の彫り物等を説明



歩いて感じて、まちの資源マップを作成

ティアガイドを養成されながら、様々な活動を展開されています。

野里のまち歩きと他の地区のまちづくり見学

このような地域の歴史や文化の再発見とともに、現在の野里のまちの資源と課題を実際に自分達の五感で感じ共有するために、まち歩きを行い、まちの資源マップを作成しました。また、他の先進的なまちづくり活動を展開されている地区（大阪市平野、貝塚市・岸和田市、篠山、奈良県今井町・五條新町など）の先人達の話をお聞きし、野里地区の特性やポテンシャルを活かし、自分達で何が出来るかを話し合っていました。

空き地を活用した野菜・草花の栽培

地区には、いわゆる密集市街地もあり、老朽化した長屋跡等に空き地が残っている箇所があります。ヒクイナ会では、そのような空き地を活用し、「たがやし隊」による野菜や草花の栽培と研修を社会実験的に行っておられます。特に、一夜官女祭用の伝統野菜である大和真菜の栽培や、収穫した芋などで芋煮会を開催するなど、皆で手を動かし、その成果を楽しみながら活動を展開されています。

わいわいがやがや会議の開催

この他にも、奉納絵による地藏盆への参加や、野里を訪れる見学者への湯茶の接待、地域の古い写真



空き地を活用し、たがやし隊を展開

を集め展示する今昔写真展など、ヒクイナ会に集まった方々が、それぞれの関心や得意技を活かして、色々な活動を展開されています。

では、なぜ、ヒクイナ会では、このような活動が次ぎから次ぎと展開されているのでしょうか？その鍵は、毎月1回、定期的で開催されている「わいわいがやがや会議」にあります。近年、「まちづくり井戸端会議」などの名称で様々な地区で開催されている地域の情報交換の場ですが、野里地区でも約2年前にスタートし、現在も継続的に開催されています。このような活動の運営方式を、ヒクイナ会の方々は、「組織に人が集まる『協同方式』から、一人からでも出来、組織は後からできる『協働方式』に、試行錯誤を繰り返しながら、移行しつつある」と言われています。

活動を継続していくために

昨年の9月で市からの支援期間は完了しましたが、これまで活動資金や人材の確保、地域の様々な団体との連携、組織のあり方を話し合わせ、現在も継続して活動を展開されています。今後も無理をせず出来る範囲で出来ることを自分達で楽しみながら活動されていく野里のまちづくりを楽しみにしています。



月1回、自主的に集まるわいわいがやがや会議



ひと・まち・地域

守山市歴史文化まちづくり館
「守山宿・町家「うの家」」が
完成しました
京都事務所／三浦 健史

ニュースレター 169 号でベンガラ塗りワークショップをご紹介した滋賀県守山市の歴史文化まちづくり館、愛称「守山宿・町家「うの家」」が完成し、1月29日にオープンしましたのでご紹介します。

経過

平成 20 年度に、守山市では中心市街地活性化基本計画が認定されました。歴史文化拠点施設整備として「うの家」の計画も事業の一つとして位置づけられており、国土交通省の社会資本整備総合交付金（市の A 工事）と経済産業省の戦略補助金（指定管理者の B 工事）を受けています。一昨年に設計プロポーザルでアルバックが選定され、工事監理についても、またテナント部分の設計監理もすることになりました。

建物について

中山道守山宿の街道筋に「うの家」はあり、付近には昔ながらの町家が残っています。「うの家」は愛称募集で決まった名前ですが、元は第 75 代内閣総理大臣の故宇野宗佑氏の生家です。主屋は間口 95 間の大きな町家で、19 世紀始め（江戸後期）～明治初めに建てられたものです。同じ頃から造り酒屋をされており、敷地内には多くの蔵があったようです。計画時点では蔵が 3 棟残っており、全て活用しています。

改修方針

「昔の町家をできる限りありのまま残す」という一見普通の方針が実は難しいことでした。主屋には吹抜けのニワの一部が部屋として囲われていたり、蔵と主屋の間は使い勝手からポリカの屋根がかけられ

たり、と様々な改修がされていました。改修された箇所についてはできるだけ原状復旧するようにしました（いつを原状とするかもムズカシイ）。一方、用途を変えて使うことや耐震補強（限界耐力計算による）、法規制など変更しないといけない部分も多く、このあたりのさじ加減が悩ましいところでしたが、元の町家の力強い架構と改修工事の職人たちの仕事相まって、魅力的な空間になったように思います。

施設の活用

機能としては大きく、展示、市民利用スペース、テナント（飲食）の 3 つです。展示では、戦後に改装されたと思われる洋風の応接間で宇野宗佑氏の業績を、また蔵の中でも格が高い文庫蔵で森口華弘氏の友禅作品や制作方法をグラフィックと映像で紹介しています。蔵には市民が利用可能な市民ギャラリーや市民活動スペース、奥の南庭にはマルシェなどのイベントに使えるよう広いスペースを設けています。テナントについては、まちづくり会社の（株）みらいもりやま 21 が指定管理者となり、近江牛と豆腐のレストランが主屋の座敷に、そばとコーヒーのカフェが元の米蔵に入っています。

オープン後

2 週間くらい経った平日午前寄ってみました。ギャラリーでは市民の方が手づくりの竹の行燈や陶芸などを展示されていましたが、頻繁に変わっていくようで毎回違う展示を楽しめます。寒い日でしたが南庭のベンチでも数名の方が休まれました。ワークショップや情報発信、更には（株）みらいも



建物外観



オープニングであいさつする（株）みらいもりやま 21 清原健社長 後ろは宮本和宏市長



吹抜けの架構がダイナミックな二ツ



森口華弘氏の作品展示

りやま21の皆さんの努力もあって、多くの方が訪れています。今後ますます市民の皆さんに愛される施設となるよう願っています。近くに行く機会があ

ればぜひお立ち寄りください。
守山宿・町家“うの家”ホームページ
<http://www.unoke.jp/>



きんぎょう

「地域産業政策のこれからを考える」シンポジウムに参加して

代表取締役社長／杉原五郎

本年1月20日（金）の午後、大阪市立大学で地域産業政策をテーマとするシンポジウムが開催され、パネリストとして参加した。

転換しつつある中小企業政策

シンポジウムの冒頭、大阪市立大学の本多哲夫先生から、1999年の中小企業基本法改定は、①問題型中小企業認識論から貢献型中小企業認識論へ、②「設備近代化支援」「業種支援」から「経営革新・創業支援」「個別企業支援」へ、③自治体の役割を積極的に評価、といった転換をもたらし、〈中小企業政策は、地域経済の成長戦略に位置づけることができるのか〉、〈中小企業の役割は、経済的側面だけでなく、地域自治の担い手であり、地域コミュニティの維持・発展を支える主体であるといった社会的側面を評価すべきではないか〉、との問題提起がされた。

大阪府のものづくり企業支援が直面する現実

パネリストの一人、大阪府商工

労働部の領家誠課長補佐は、大阪府のものづくり企業支援の現状と課題について具体的なデータを示してリアリティのある報告をした。

- ・府内のものでづくり企業は、約4万1千社、従業者数は約56万人、製造品出荷額は約11兆円と高い集積がある
- ・従業者数が10人未満の事業所は、2000年から2008年にかけて約1万4千社（全体の33.8%）が消滅している
- ・大阪府は、施策の対象を10人以上99人以下の中小企業にターゲットを絞り、東大阪にあるMOBIO（モビオ）を拠点に個別企業支援を柱としたものでづくり支援をしている
- ・府職員は、一人が30社を担当して、出会いの場づくりに奔走している

中小企業を主軸にした地域の活性化

私は、「憲章、条例、そして地域づくりを考える」をテーマに、中小企業経営者の立場から報告した。EU小企業憲章、米国の連邦中小企業庁による中小企業政策、わが国の中小企業憲章閣議決定など、中小企業政策をめぐる世界的な潮流について紹介した。さらに、大阪府内では、大阪府、大阪市、八尾市、吹田市、枚方市、大東市などで中小企業振興条例づくりが進展しつつある事実を述べた。

また、アルパックでの中小企業支援の事例として、「京都試作ネット」と「まちなかバル」の紹介をした上で、元気な企業づくりが大切なこと、行政と中小企業がお互いの距離を縮める努力が必要なこと、中小企業に対する的確な社会的位置づけをすべきこと、の3点を問題提起した。

これからの地域産業政策に求められること

シンポジウムには、大阪市立大学の受講生百数十人に加えて、自治体や中小企業の関係者20数名の参加があり、これからの地域産業政策を考える上で幾つかの重要な検討テーマが浮かび上がってきた。中小企業を現在の日本の経済社会の中でどのように位置づけるのか、地域産業政策はどこに力点をおいて展開していくべきか、その担い手をどのように育てていくのか。

「中小企業に就職したいですか」との司会者の質問に対して、会場の学生から、「起業するために、中小企業への就職を考えている」「大企業か中小企業かではなく、自分のやりたい仕事ができるかどうかを基準に企業選択を考えている」との発言がでた。「絶対的衰退の危機」にあるとも言われる足元の大阪経済の再生を考える時、たいへん心強く感じる若者の発言だった。



「本格フレンチを気軽に楽しみたい」

京都事務所／山崎 博央

国道24号を奈良方面に南下し、山城大橋を東へ向かうと、川沿いに白いすっきりとした建物があります。

本格フレンチのお店「レストラン庵樹」です。

「レストラン庵樹」は社会福祉法人京都ライフサポート協会が運営する多機能型事業所「工房あんじゅ」の一事業として経営されているフランス料理のお店で、昨年5月にオープンしました。

本格フレンチを提供してくれるのは、某有名料理店等での実績をもつ経験豊富なシェフとパティシエ。味の方も妥協は許しません。

サラダなど料理に使われている野菜はすべて、ライフサポート協会の運営する施設の利用者のみなさんが作られたもので、無農薬有機栽培のもの。素材にもこだわっています。

また工房「あんじゅ」では、レストランのほかにもパンやスイーツの製作販売も行っています。

ホール係や洗い場、工房の各所に利用者の方が働いています。働くことにより地域社会とつながり、それを通じて感性が育まれるという、療育的

な役割も果たしています。

京都ライフサポート協会とは、かれこれ10年以上前に知的障害者入所施設（横手通り43番地「庵」本誌VOL.113）の設計以来のお付き合いです。「本格的なお料理とサービスで勝負する」というのは施設長の樋口さん。付加価値をつけることで商品価値をあげ、ちゃんとした収入を得て、ちゃんとした賃金を支払うことが大事。「一人ひとりが幸福を享受できる社会の実現」を理念に、そのための取組として今回の先駆的な事業に挑戦し、レストラン等の企業経営の側面と就労・療育の機能を融合させた新しい形の福祉を実現しようと取り組まれています。

ディナーは要予約。ランチもなかなかの盛況ぶりということなので、予約をとる方がベターかも。ぜひ一度ご賞味あれ。

レストラン庵樹

京都府綴喜郡井手町多賀東北河原2-13

0774-82-7800

<http://www.life.or.jp/Anju/index.html>



レストランへのアプローチ
もちろんバリアフリーです



ランチメニューはオードブル、スープ、メイン、パン、デザート、ドリンクのセットで¥1600～、ディナーは¥3500～

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82
大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F
東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F
九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128